The 'Marriage Problem' of Korean Settlers in Japan at See
in the Readers' Columns

HASHIMOTO Miyuki

In this paper, I examine the relationship between spouse selection and the issue of ethnicity for Korean residents in Japan through analysis of the readers' columns about the 'marriage problem' found in Tbitsunippo (Unification Daily). This analysis shows that spouse selection was not oriented to an individualism but rather to strengthening a new ideology of the family. While endogamy within the Korean residents in Japan is actually on the decline, this is related through a reconstruction of family and ethnicity.

1. 問題の所在

在日韓国・朝鮮人の新聞「統一日報」が1998年12月29日の社説で取り上げた「在日同胞シンポジウム'98」は、在日韓国・朝鮮人同胞の帰化急増と日本人との結婚増加という「重大問題」に、初めて正面から取り組んだ公開的シンポジウムであった［統一日報1998.12.29］。一種クーパー視させてきた「統一日報1998.12.27」テーマゆえ、行事としては画期的であったが、話題としては目新しくもなかった。同紙は70年代から日本人との「国際結婚」増加現象を取り上げ、その「＜量の変化＞」で、「在日同胞社会」＝同胞共同体の存立基盤を根拠から揺さぶっている」と報じていた。＜変化＞は質的なものでもある。「もし、伴侶に韓国人か日本人を選ぶことに「民族意識」が多いに関係するものであると仮定すれば、それはもちろんおおずと、青年たちの「民族意識」の希薄化を如実にあらわしている」［統一日報1978.1.27］と解すからである。「結婚問題」とはまず、日本人との結婚による、「民族意識」の希薄化あるいは「在日同胞社会」の脅威に対する懸念であった。同胞同士の結婚を奨励する調査にもかかわらず、日本人との婚姻はその後も増加を続ける（図1参照）。

在日韓国・朝鮮人の配偶者選択に関する研究は、総に米国における「近代」と「分離」を配偶者選択の面から考察した［大東2002］。この視点は、民族を実体的かつ固定的に捉え、世代等の変数によって细分化する。一方、「在日朝鮮人」らしいという線引きに疑問を投げる鄭映栄は、民族そのものよりも、民族をめぐる社会のメカニズムに注目する。在日朝鮮人の結婚謎は、世代間の男女間で異なって変化してきたと考えられるが、それは、植民地支配下に戦後の民族差別に抗すべく、近代化への抵抗の中で強調されてきた家族主義に関係している［鄭2000:33］。そのとき、家族規範に基づく役割期待を引き受ける成員は、彼／彼女自身の配偶者選択を加重的に制限することになる［橋本2002］。日本近代史と関係の深いエスニック・マイノリティ(1)の配偶者選択を考察する上で、家族は、無視できない要素である。

本稿では、「民族」と配偶者選択の関係を、「配偶者選択の主体」（以下では括弧を略）
という視点から考えてみたい。ここで注目するのは、配偶者を選択する人そのものではなく、「誰が配偶者選択主体とみなされるか」である。在日韓国・朝鮮人集団に同胞内婚という規範があるとするなら、誰がそれを実践／離脱する主体とみなされるのか。また、そのようにみなされる根拠は何か。分析対象は、上述の「統一日報」紙「読者の声」欄に掲載された結婚関連投書群である。「結婚問題」をめぐる言論空間で示される「現実」を、配偶者選択主体を切り口にして捉えることにより、「民族」なるものが逆照明できないだろうか。この試みは、「民族」視角からの「結婚問題」解釈である(2)。

以下、次の手順で議論を進める。まずマイノリティ・メディア投書欄の配偶者選択言説を分析する枠組みを提示した後、当該メディアの性格と「結婚問題」をめぐる社会的背景とを押さえ、結婚関連投書を概観する。続いて、配偶者選択主体の類型ごとに投書を分析する。最後に、「結婚問題」から見える「民族」そして「家族」について議論をまとめたい。

2. 分析枠組み
（1）マイノリティ・メディアの投書欄という場

新聞の読者投書欄は、共通の関心事をめぐって複数の言論が現われる場の一つである。投書を分析する方法はいくつか考えられる。先行研究が指摘するように、掲載された投書は現実の社会をそのまま反映するとは言えない(4)。例えば投書の主を、現実を伝える媒体か／自身の見方を表明する主体かによって、また投書の内容を、書き手の置かれた現実か／投書（群）が形成する「現実」と考えるかによって、投書の捉え方は異なる(5)。本稿では、何らかの立場を取る投稿者が示したそれぞれの「現実」を議論の場の構成要素とは捉え、複数の立場から織り成す政治を観察する。ある程度類似した現実状況に生きる人びとのマイノリティ・メディアである場合、共通の関心事が比較的設定しやすいため、立場の複数性を分析しうる有効性が高い。複数の立場が生起する争点には、配偶者選択主体を据える。

（2）配偶者選択の主体——3 類型と内婚規範
K. デイヴィスは、家族の歴史的変化を扱うための変数一覧表の配偶者選択項目として、誰が選択を決定するか、そして、選択の基準（内婚と外婚）の 2 つを挙げた［Davis 1949: 415 ］。

前者は、配偶者選択の主体である。ディヴィスに依拠して鶴岡勤は、日本の婚姻類型を提示した。鶴岡によれば、共同体主義／家族主義／個人主義という各婚姻原理(6)は、婚姻
によって実現される利益の享受主体による区別であり、各社会の支配的イデオロギーとなる。明治以後の農村では家族主義原理が共同体主義に代位したが、近代化と戦勝を経て個人主義が浸透し、依然として強力な家族主義と角廻るに至った［村岡 1976:77, 82］、という。村岡類型を受けて保積京子は、近代社会における結婚（相手）の個人選択化と述べ、自由様愛と功利主義が共存する「個人的・私的イベントの要素」を強調する［善積 2000:4］。配偶者選択の目的および選択主体は、共同体 → 家族 → 個人と移行したというわけではない。ここで注意したいのは、ディヴィスはそもそも、近代化に則った家族の変化ももと言えれば進化を前提していたことである。この前提があって結婚原理の代位というとき、それは経験的というより理論的である。また、そうした移行はあるとしても、なおも変わらない部分や家族内関係の構造変化をどう捉えるかという問題は残る。さらに在日韓国・朝鮮人家族の場合、鄭が指摘したように近代化への抵抗を抱えてきたものなら、単線的移行は考えにくい(7)。検討に値するのはむしろ、婚姻原理相互の角廻の側面だろう。

後者は、配偶者を選択する基準である。本稿は、在日韓国・朝鮮人同士の結婚を命じる内婚規範に注目するが、これを絶対的基準としては捉えない。1つの規範だけで人間の行為を説明することには無理がある。それでも、当該集団に影響力をもつ規範に対する立場の取り方の相違を分析対象とするなら、その選択基準を加味することはできるだろう。なお本稿では、同胞内婚または内婚規範とは集団規範を、同族結婚とは、個人単位の同類婚を意味する［cf. 構石 1998:46］。このほかの選択基準(8)にも、折り触れて言及する。

こうした枠組みに基づき、マイノリティ・メディアに現れた「結婚問題」に関わる複数の立場の投書、つまり配偶者選択主体についての「民族的」的論読を読み解きたい。具体的な投書分析に入る前に、投書が書かれた背景および「結婚問題」の概要を押さえておく。

3. 『統一日報』にみる1970-90年代の「結婚問題」
（1）『統一日報』「読者の声」欄
『統一日報』は、1959年に創刊された在日韓国・朝鮮人による日本語新聞である(9)。統一運動紙として、70年代初めまでは朝鮮半島の統一問題や政治経済の記事が紙面を埋めた。70年代半ばになると、社会的に在日韓国・朝鮮人高齢者福祉や結婚のような生活情報、在日二世らの人権運動などの記事が見られ始める。差別撤廃運動が盛んになった80年代は、会社ぐるみで積極的にキャンペーンに参加した。95年に経営陣の交代があり、運動紙からジャーナリズムへの移行を図っている［統一日報1999.1.1］。なお『統一日報』の立場は、在日韓国・朝鮮人の2大民族団体のうち日本大韓国民団（民団）寄りと言える(10)。

「読者の声」欄(11)は74年1月に設置され、毎号1〜2件の投書を掲載してきた。時折、「皆さん、一緒に考えましょう」と呼びかける投書がある。しかし応答が掲載されることはまれで、議論の形になりにくい。そもそも合意形成を企図した場ではない。ただ、ある程度身元（居住都道府県、姓名、職業、年齢）を明らかに発表されるため、欄外で議論を呼んでいる可能性はある。

（2）「結婚問題」をとりまく1970-90年代の社会的背景
植民地解放時点から大まかに数えると、70年代前半および90年前後は在日韓国・朝鮮人の世代交代期にあたる。ここで、『統一日報』の社会面から、この間の「結婚問題」を
めぐる在日韓国・朝鮮人「同胞社会」の動きを追ってみる。

70年代は、在日一戦から二世へという世代交代を扱う記事が数多く掲載された。例えば1978年の元旦号では、各界で活躍する二世たちが「在日同胞のあり方」を語る座談会報告がある [1978.1.1]。この頃、若い世代の男女の出会い企画が紙上に現れた。75年時点で、「同胞社会におけるこの種の試みは前代未聞のこと」とされたが「何組の良縁まとまるか 都島同胞青年男女の集い 1975.10.28」、78年には「ブーム」扱いとなる「集団見合いブームに？ つのる母親の危惧 大阪婦人会が火つけ役」1978.1.14。この記事に付された婚姻統計が反響を呼び、2週間後、冒頭で引いた記事「在日同胞と日本国際結婚 同胞同士は頭打ち 激増する日本人相手 同胞社会の存立幅く？」[1978.9.29] が掲載された。物議をかもしたその統計が図1である （ただし2004年現在）。少なくとも当事者の方が韓国・朝鮮籍である日本での婚姻届出件数（日本以外の国籍者との婚姻を除く）の推移である（12）。

注目されたいのは、韓国・朝鮮籍者同士の婚姻が1971年をピークに減少に転じたことである。反対に韓国・朝鮮籍者と日本籍者との婚姻は増加を続け、こうした傾向は現在も大きくは変わらない。韓国・朝鮮籍者同士の婚姻を日本籍者との婚姻が初めて上回ったのは76年である。この頃、《統一日報》紙において初めて「結婚問題」が浮上したのである（13）。

『統一日報』は、社会面での報道、また78年に始まった民団婦人会大阪主催の集団見合い「キュービット・セレモニー」（14）の協賛などを通して、積極的に「結婚問題」に乗り出した。当初行方でなく、在日韓国・朝鮮人対象の他のパーティー企画や結婚相談所の広告を頻繁に掲載する。家庭面でも、女性の生き方、見合いの問題、結婚式の作法など多様な角度から結婚関連記事を掲載し、96年元旦号に見開きで「結婚問題」を特集した 「新春座談会 在日同胞の結婚問題を考え 同胞どうし結婚にはもっと出会いの場を」 1996.1.1]。日本人との婚姻増が発見されて以来、「結婚問題」が「同胞社会」の問題となり、個人間の「出会い」や「積極性」が問われるようになった。

（3）結婚関連投書の概要とさまざまな「結婚問題」

次に、読者投書欄「読者の声」を概観する。1974~96年に掲載された投書のうち、結婚を主題とする147件（15）を扱う。年次別の掲載投書数（図2）を見ると、80年代後半に活発化したばかり大小の波はあるが、関心は持続していると言える。

「読者の声」を構成する投書の主の属性をみると、性別（名前および内容から筆者が判
図－２ 「読者の声」の結婚関連投書数

断）では男性 80 件、女性 62 件、不明 5 件。年齢別では、10 代 3 件、20 代 82 件、30 代 26 件、40 代 14 件、50 代 10 件、60 代 6 件、不明 6 件である。女性より男性が若干多く、20~30 代からの投書が多い。投書内容はおよそ 6 つに大別できる。「読者の声」の雰囲気を伝えるため、各タイプの典型例を紹介しながら具体的に「結婚問題」を見いだす。

初めに予想した「結婚問題」とは、端的には「①日本人との結婚増加およびそれに伴う被差別の問題」であった。典型的な例が A（男性 26 歳） [1982.4.3] である。A は、日本人恋人の父親が帰化を求めてきたことに対し、「いったい韓国人のどこが悪いんだ」と怒鳴りそうになった。「できれば、同じ立場の韓国人と付き合いたい」と思いもしたが、「国籍に関わらず、いい人はいるのかだから」と、6 年以上交際してきた。しかし義父になる人の「無理解」に直面し、「日本人と韓国人の結婚は、所詮無理があると思うようになった」という。ただし①に分類した投書のうち比較的多いのは、日本人との結婚への反対を再考するものである。在日韓国・朝鮮人自身が「結婚問題」を捉え直す傾向が見られる。実際のところ①は、結婚関連投書の 2 割程度に過ぎない。これは結婚差別が少ない証拠というよりは、「結婚問題」として当該欄で論じたい事柄がほかにもあるためと思われる。

量的に多いのは、「②結婚相手を見つけることへの不安や、在日韓国・朝鮮人対象の結婚斡旋事業に関する内容である。たとえば B（男性 39 歳） [1979.3.8] は、キュービット・セレモニーを「本当にいい企画」だと評価する。B は初め、当該企画に批判的であった。「『集団見合い』にいいイメージがないし、結婚は「あくまでもプライベートな問題」だと思ったからである。しかし「同胞青年男女が意外と、いい結婚相手をみつけられなくて困っている」事態を目の当たりにし、考えが変わった。出発点の相手探しという深刻な「結婚問題」は、「プライベートな問題」に対する第三者の介入に正当性を与えた。

内容の面で深刻な事例が多いのは、「③結婚当事者と親との葛藤、親世代に対する問題提起」である。C（女性 32 歳） [1982.3.27] は、やや晩婚となった友人の話を紹介する。長くつきあってきた同胞との結婚が遅れたのは、「相手の男性の故郷が渋谷道ということ」を理由に、友人の両親が反対したためである。C は、「この開かれた日本の社会の中で」両親が反対し続けることだけでも「時代遅れ」なのに、その上、本国の差別感情を「私達二・三世」に押し付けと批判する。「『地方差別』」すれば、同胞結婚を望む親自らがその機会を狭めるという矛盾、「本国の悪しき『伝統』」を維持する「同胞社会」の問題を提起している。しばしば投書で報告される激しい家族内葛藤の原因は、親世代の地方差別のほか、同胞結婚への固執、女性への結婚圧力、見合いの強要などである。

「④在日同胞社会の将来や任務、それに個人の責任」に言及する投書は 80 年代に多い。D（男性 67 歳） [1993.5.21] は、「教育問題と結婚は在日同胞の運命を決する重大な問題」とし、民団に「真剣な対処と対策を求めて、『民団は維持が政治団体ではない。在日同胞社会の民生活が主導的な役割を果たすなければならない』という持論を展開する。「結婚問題」の被害者・解決主体を、当事者個人や親ではなく同胞共同体とする投書は、高齢男性から相次いだ。

- 105 -
「⑤在日韓国・朝鮮人同胞の結婚式に関する賞否両論」には大きな流れがある。1970〜80年代は、豪華挙式の風潮に対する、共同財保護や親の見栄に及ぼしの批判が多かったが、90年代は民族色豊かな披露宴の演出への積極評価に重点が移った。例えばE（女性 年齢不詳）[1977.5.28]は、「外国に住むという悪条件のもとで長年にわたる貴重な民族の財産」が料理に化けるのは「モッタナイ」とし、「同胞社会指導層」に意識改革を呼びかけた。「結婚問題」は、在日韓国・朝鮮人の経済状況を反映している。

このように、投書の中の「結婚問題」は多様である。投書の多くは同胞内婚規範を共有しているが、ここも重要的是、すでに内在化した内婚規範にどう向き合って個々の状況に対処するかである。そして内婚規範と向き合う人は誰かといえど、結婚当事者本人だけではない。親または「同胞社会」などの存在が無視できないのである。

では先に、配偶者選択主体という視点から、各投書の主の立場の分析に入ろう。

4. 若い世代の配偶者選択と家族・共同体

仮に、「その結婚で配偶者選択の『民族』基準を設定するのは誰か」、あるいは「誰のためにその選択をするか」と問えば、各投書の主はどれを選ぶだろうか。こうした基準に基づいて文面から判断し、投書111件[16]を、個人／家族／共同体という3つの選択主体類型で分類した。在日韓国・朝鮮人の場合、各主体はさしあたり、個人 = 結婚当事者、家族 = 主に親、共同体 = 「民族」（後述）と言い換えられる。総合類型を踏襲した3類型であるが、当該社会の単一の支配イデオロギーとしてではなく、投書の主の立場を個々に解釈する[17]。社会的役割や経験によって、書き手の取る立場は異なると考えるからである。

図3は、各類型の構成比内訳の推移である（全年齢層）。これをさらに、投稿時点で比較的若い部類に入る結婚当事者層（投稿時点で35歳未満の者およびいわゆる結婚適齢期と思われる年齢不詳者。以下、若年層と呼ぶ）と、その上の年齢層（35歳以上の者および適齢期以上の子を持つと思われる年齢不詳者。便宜的に親層と呼ぶ）に分け、該当投書数の推移を示したのが、それぞれ図4、図5である。実数が多くないため一般化は難しいが、投書全体の動きがある程度つかめる。

![図3 配偶者選択主体類型構成比（全年齢層）](image)

![図4 配偶者選択主体別投書数（若年層）](image)

![図5 配偶者選択主体別投書数（親層）](image)
これらを見る限り、個人主義が家族主義に代位する趨勢はうかがえない。図 3 では、相対的に 70 年代には個人主義型が、80 年代は共同体主義型が、そして 90 年代には家族主義型の勢力が強い。これをどう考えたらよいか。各類型の投書を具体的に見ていく。

（1）個人主義型

個人主義型は若年層の中では多勢であるが、他の類型を圧倒するほどではない。親層にも個人主義化の気配はない。図 3 で個人主義型が比較的優勢なのは、個人主義型の 8～9 割を母集団の多い若年層が占め、全期間を通して影響力が大きいからである。同調内婚規範に対する積極派／消極派／判断留保、個人主義型内のそれぞれの立場の投書を順に見ていく。

内婚積極派は、同胞結婚を自然視するか、それに何らかの価値を見出している。X1（男性 28 歳） [1983.3.3] は、「韓国人として生まれたからには、韓国の女性と結婚したい」と願う。それは、「親の希望に沿う」意味で渋んで、自身が韓国で感じた「母国のすばらしい息吹」、日本社会の差別への「憤り」という、「心から戦い起こる自分の民族に対する愛着」が根拠となっている。X2（女性 20 歳） [1989.11.18] は、「私たち三世は三世なりに考え、同胞同士の結婚を希望している」とし、見合いや結婚斡旋事業を「一世や二世の人たち」が与えてくれる「チャンス」と解釈する。ただし、自然な出会いと互いの気持ちを優先したいので、結婚よりも、まず「楽しく触れ合える同胞同士の輪」を求めている。

内婚規範消極派は多くないが、X3（男性 26 歳） [1988.4.9] の例がある。X3 は、「貴紙」や同胞結婚を催奨する「民族団体の方たち」に叱られるかもしれないとしながら、自分には「国籍のワーク」でくくってしまう結婚観」はないと断言する。若者たちは、「少数民族の弱体化」といった「同胞全体から見て不幸なこと」と、「自分自身の結婚観が結び付かない」という。実際に日本人と交際している X4（男性 28 歳） [1981.10.1] が思うに、同胞結婚は「最善」ではあるが「理想」は過ぎない。人間同士、出会って好きになれば、結婚へと発展するのは「当然」であり、今や「どういうような国際結婚」を目指すかを考えるべきだと主張する。X3 や X4 にとって、同胞結婚は現実味のないものである。

同胞内婚を留保する投書には、「民族」および「結婚」の意味を問い直す意見がある。X5（性別不明 28 歳） [1978.7.20] は「集団見合い」を「やりすぎだ」と思う。趣旨には賛同するが、「男女が性的に結びつきあうだけで本当に民族社会が守れるのか」の疑問であり、「結婚だけは同胞というのは本末転倒している」気がする。同胞結婚それ自体を否定するのではなく、内婚規範に固執することにおける矛盾を突いている。X6（女性 24 歳） [1985.11.8] はかつて、「母の涙」のために日本人恋人との結婚を諦めた。「私という一人の人間が、個人として生きてゆく上で民族とか国家というものかどれほどの比重を占めるのか」という疑問は、今も残ったままである。日本人との結婚が「民族性を否定して結婚すること」になってしまうところに、「私たち在日同胞の悲しさ」を見る。

ロマンティック・ラブ指向が強い中、同胞同士が出会う機会さえなければ、同胞結婚は「自然」にはできない。日本人との結婚については、断定的な良し悪しの評価だけでなく、「国際結婚」の中身に関心を振り向ける意見が現実的となりつつある。もっとも個人主義型の場合、たとえ同胞結婚を望んでもそれができなければ、結婚当事者が自己の中で内婚規範と何らかの折り合いを見いだせばよい。複雑なのは、当事者以外の親などを配偶者選択主体とし、当事者の意思と衡突する場合である。
（２）家族主義型
親などを配偶者選択の主体とみなす家族主義型の投書は割合を高め、90年代には最も優れたカテゴリとなっている。家族主義型の伸びを担うのは主に親類である。また若年層でも、家族主義型の実数は90年代に減少したもの3類型中の構成比は伸びている。

家族主義型では、同胞内婚規範それ自体が第一の争点ではない投書が多い。若年層の投書から見いだしたY1（別性不明 17歳）[1978.7.21]の親戚の男性は、恋人の親戚に総連幹部がいるという理由で、父親に結婚の意思を無視されている。Y1は、この「オジさん」に北朝鮮や総連にまつわる「悲しい思い出」があることは理解できるが、それを次の世代に「ゴリ押し」するのは一世の「わがままな言い分」と見る。「日本人ではない、同胞の女性とせっかく結ばれるとしているのに」、それを怒るオジには合理性を見出せず、オジの態度の軟化を期待する。Y2（男性25歳）[1986.7.2]の友人の同胞女性は、留学先の米国に日本人恋人がいたにもかかわらず親の希望で帰国し、同胞と見合い結婚した。友人が語った「恋人と親をはかりにかければ、親の方が重い」という立場は、Y2も同じである。「日本で差別を受け、苦労しながらもわたしたちを育ててくれた一世の姿」を思い浮かべるからである。親の要求に自らを合わせて対立を免れるY2とある意味で対照的なのは、Y3（男性28歳）[1991.2.28]である。Y3は「民族意識が強い」家庭に育ちながらも、日本人女性と結婚を誓い合った。普通でない反対那の父親と恋人への愛情の間で悩んだ末、相手の女性を韓国籍に入れ、式では彼女に民族衣装を着せることにして、事態を収束させたという。Y3も親との対立を回避しているが、日本人との結婚を内婚規範に沿う形に加工、あるいは同胞結婚そのものを読み替えた点で異なる。親に認めさせたのは、原初的同胞ではなく、国籍操作や衣装で作り出した新しい「同胞」なのである。

今度は親層である。Y4（男性60歳）[1987.3.21]の2人の子供は気がつければ30歳、結婚相手選びが「切実な問題」となっている。「最近の若者は絵中身のない人」が多く、特に「民族心がない」のを見るにつけ、Y4は親の教育を疑う。「仲介手数料が目あて」の業者には相談する気になれないので、民団が全国の民間相談所、婦人会の結婚情報を取りまとめを望む。Y4が民族組織に寄せる期待は、親代わりあるいは仲介業者の延長の補助的なものにすぎない。Y5（女性46歳）[1992.1.8]は、息子が従弟の「国際結婚」に反対したことから「雲行き」を怪しみ、自分も「年頃の子供を抱えて悩むオモニ（韓国語で「お母さん」—筆者注）の一人になった」実感をつむる。子供の「結婚問題」を通してY5自身が、在日韓国・朝鮮人かつ母である自己を再認識し、「オモニ」役割を獲得する。Y6（女性43歳）[1994.12.2]は在日同胞の結婚親の「『正常化』」を喜んで言う。「国際結婚ではなく、同胞同士が結ばれるのであれば、外観にとらわれる時代は終わったと考える同胞の親が増えている」。つまり、学歴や容姿、財産といった条件にこだわらないようになったところで、「同胞同士」という歯を親が守ることに関しては、Y6に疑問の余地はない。

家族主義は結局、親中心主義である。家族主義型の若年層（および親層の一部）にとって、同胞という基準は親の同意に次ぐ二次的要件である。親の言い分や強制に不満なら、親に枠設定の修正を求めるなど調整を図るが、最終決定者は親のままである。70年代の投書には結婚当事者と親の直接対決がみられたのに対し、90年代には選択主体としての親を尊重する協調的な若年層が目立つ[19]。他方、親層にとって内婚規範および「民族」はかなり自然化されているが、これを絶対化するよりは、理想と現実の懸隔にただ悩む親
多い。これらは旧来の原理的な家族主義とは異なる、内婚規範を保存しつつその内容に修正を加えた形の、相互妥協的な新しい家族主義と言える。90年代の家族主義型の優勢は、緩い家族主義という質的拡大と、内婚規範に駆り立てられた親層の量的増加によるものである。

(3) 共同体主義型

共同体主義型が占める割合は、若年層においては3類型中最も小さく、親層でも80年代の勢いは失速しつつある。投書の主が同袍内婚を語るとき、在日韓国・朝鮮人の共同体(19)を括る何らかの枠を想定していると考えられる。この共同体という枠は、とりもなおさず、各投書の主の考える「民族」なるものである。しかし、在日韓国・朝鮮人といえども実際には多様な人びとの集合であり、「民族」成員の繋引きも「全体的利益」も、固定的には捉え得ない。個人（当事者）や家族（親）に比べると、配偶者選択主体としての共同体は抽象的なカテゴリーである。そこで3つの志向に分けて共同体を考えることにし、まずは、共同体主義型が全盛の80年代に多かった組織志向的な共同体主義から、投書を見ていく。

例えばZ1（男性62歳）[1986.6.26]は、子供を同胞結婚させたい理由として、「日本とのあとの苦い歴史を目当にした体験」および「このままであればわたしたちが血統注いで築き上げた団体社会が無に帰してしまう恐れ」を挙げる。後者に関連して、Z2（男性54歳）[1985.5.21]もまた、同胞結婚割合の低下が「在日同胞社会のあす」を脅かすものと認識する。Z2は、民団等が成員の生活に密着した民生問題に取り組むことが「若い世代の団体はなれ」対策になると、民族団体の全体利益に言及する。組織志向の共同体主義は、『統一日報』の政治的立場をうかがわせる。しかし「少数民族の弱体化」と同胞結婚を結びつける論法に対しては、「それはそれでもわかりますが」としながらも「若者の意識」という「現実」との乖離を突きつけた、個人主義型のX3[1988.4.9]の例がある。また3(3)で見たD[1993.5.21]のように、民団に対し政治役割よりも民生対策を求める意見も複数ある。組織は、内婚規範の基盤としては定着しなかったようである。

その一方で、Z1が先に挙げた「あの苦い歴史」は、生身の一世など重要な他者を介しており、より説得力がある。これを上世代志向的な共同体主義としておく。Z3（女性21歳）[1985.5.27]が考える幸せは、「人間らしく生きること」であり、それが日本人との結婚を考える上での争点となる。Z3が抱つ立つの、「あまりに人間性を無視された生き方」を余儀なくされてきた「一世たち（親たち）の存在」である。それを「自分のこととして受け止め、思いやる」ことが、二世である自らに行動指針を与えると言う。キューピット・セレモニーを参観したZ4（男性年齢不詳）[1983.4.8]は会場で、「民族の遺産を受け継ぐべく」集まった若者たちの姿を見出した。目視で当たった者同士で結婚してもいいくらい、参加者全員が親友家庭を築けると信頼する。Z4の「確信」の根拠はおそらく、同じ「民族」であるという点である。その「民族」とは、「異国に生まれ育ち」何らかの「遺伝」を受け継ぐ「宿命」の共同体である。Z3もZ4も、上世代の歴史を継続する母体として「民族」を捉えており、結婚とは、その一翼を担う同志との協働を意味する。

「民族」なるものを実体的集団に限定しない共同体主義もある。結婚当事者自身の内面の問題として「民族」を捉え、その自らを「同胞社会」に位置づける、当事者志向的な立
場である。キュービット・セレモニーに参加した経験のある Z5（男性 28 歳）[1986.11.12]は、「家・富、職業、容姿……はなはだしきは、本国の出身地」で相手を判断する参加者や周りの問題を指摘する。Z5 は自らが「在日」として安心して生活したい」という視点で同様社会の未来を考え、同じ考えをもつ結婚相手を求めている。また「国際結婚」の扱い直しもある。Z6（男性 35 歳）[1994.8.31]は、「それぞれの民族性を認め、尊重する」のが「本来の意味での国際結婚」であるとし、それができない日本での現実を踏まえ、「同胞自らの民族性を捨てることが必要だと主張する。Z5 のいう「在日」という「立場」、Z6 のいう「民族性」は、個人単位の内面的な「民族」である。形式の結婚契約に距離を置き、個人の生活を豊かにする「民族」という生き方を構築しようとするのである。

「読者の声」欄の共体主義者は、「結婚問題」対策論の中で成立した側面がある。同族結婚を願う親の結婚統制と、異性との出会いを求める若き世代の接点、そこに共同体の全体利益という価値が付加された。この文脈で共同体は、規範を付与する実体的集団となる前に、すでに「結婚問題」の解決主体として動員されたのである。しかし共同体主義は、その担い手である結婚当事者個人や親の意欲・利益と矛盾しては維持されえない。80 年代の共同体主義は、拡大した家族主義、また一部は個人主義に吸収されたようである。

5. 結びにかえて——再構築される「結婚問題」そして「民族」

複数の「読者の声」から、配偶者選択主体の設定をめぐる政治が見えてくる。一つに、家族主義型を中心とした 3 類型間の相互関係がある。個人主義および共体主義の中では、個人／共同体のあり方が家族と接合しうる形で模索され、家族主義もまた、社会状況に応じて変形させられる。もう一つは、若年層と親層の関係である。親層の内婚規範への執着に対する若年層の態度は 2 つ、すなわち部分的妥協から議論の常からの退出(20)である。本稿は、退出した若年層を捉え得ない点で、「結婚問題」理解における限界を免れない。

「読者の声」欄の投書の主たちは、在日韓国・朝鮮人集団を代表するわけではない。ただそれぞれの立場から、「結婚問題」という共通の関心事をめぐって自らの意見を表明することにより、支配的社会から自立した自集団の公共性形成に参加する。「結婚問題」は、結婚当事者個人の実践だけの問題ではなく、「民族」について発言するための一つの議論の常である。逆に言えば、「結婚問題」を語ることで「民族」が意識化され、配偶者選択に「民族」なる要素を求めるという見方ができる。これまでの考察から示唆されるのは、結婚に「民族」の含意を持たせるとき、重要なエージェントとして浮上する「家族」である。実際に家族が結婚相手を決めて押し付けるのは別の話である。「結婚問題」を語り構成する主体は、あくまでも投書の主、個々人である。したがって、「結婚問題」における「民族」なるものを理解するために、彼／彼女が家族をいかに捉えるのか、さらなる検討が必要だろう。

記

（1）在日華僑についても、配偶者選択を扱った当時の研究がある。過去によれば、在日華僑がこだわる配偶者選択基準である「中国人」の対立項目は、外国人というより日本人である（過 1999: 115–20）。

（2）本稿の投書分析は、物語叙述をめぐる系譜の構築主義〔千田 2001〕の立場と通底する。視角の数だけ「現実」があるとしたから、在日華僑の「結婚問題」は、「民族」の捉え方に応じて異なって描かれうる。

（3）フライヤーは、下位の対抗的な公共性が必ずしも高潔でなく、反民主主義的で反平等主義的で
ありえることも付け加える [Fraser 1992=1999:138-39]。これは、公共的なもの、また「われわれ」という言葉に対する客観性を失わないために、必要な視座だろう。

（4）大出春江は、一投書名における、データの説明性を把握できない問題とデータのコーディングでバイアスが避けられない問題を指摘する [大出 1989:27]。また亀山聖未は、人々が提示することによって投書欄の社会的〈経験〉のリアリティーが構成されると捉える。亀山の視点では、採用の難易、読者への配慮、企業の方針による配置といった、投稿者および編集者による構成のため二重に「ありのまま」の現実でないことには問題ない [亀山 1999:57]。

（5）この2つの軸の組合せによって、投書がどうものを、①投書内容の背景となる現実それ自体、②書き手の認識の要素となる現実、③書く行為を通して書き手が示そうとする「現実」、④投書内容によって描かれる「現実」それ自体、と見ることができる。それぞれの先行研究には次のものがある。①一般紙家庭面の女性投稿欄を分析対象とした、1950-80年代における社会意識の変化分析 [大出 1989]、②受験生雑誌の『受験ユーモア』欄を素材にした、各時期の受験生が置かれた社会的状況や受験生エーツの変化の解釈 [尾中 1990]。③3つの全国紙の投書群における、人々の〈O-157〉という社会的経験に関する考察 [亀山 1999]。本稿はにあたる。

（6）共同体主義とは、共同体の秩序維持とその全体的利益が最優先に考えられ、共同体によって規制される結婚。家族主義とは、家族を家族の繁栄と永続という「家」の目的を達成するための手段とみなし、家族から規制される結婚。個人主義とは、個人の独立と自由が尊重され、結婚そのものに価値が認められそれ自体が目的となり、夫婦の協力による幸福の実現がめざされる結婚をいう。

（7）また在日韓国・朝鮮人の場合、類型3区分は参照できても、その内容が同じとは言えない。家族をめぐる法制度のほか、日本の「家」制度を代わる婚姻原理として無視できないのは、李朝時代からの儒教的な慣行法である。婚姻の目的は祖先祭祀の延续とされ、婚姻を定め儀式を行う主体は家長であり、当事者の意思は問われなかった [李 1966:42-3]。

（8）例えば、本人の人柄、職業、親の出身地、資産、占いによる相性、迷信へのこだわり、年齢、身長、学歴、きょうだい、居住地 [統一報 1985.3.19]。このほか在日韓国・朝鮮人に特徴的な条件として、所属する民族団体、民族意識、同姓同名であると言われる。

（9）『統一報』は、旬刊2ページ立ての『朝鮮新聞』として発行から発行数や発行回数を増やし、73年に現名称に改称するとともに日刊化、30年間所のこの状態が続いたが、98年1月に隔日刊化、同年5月には財政難を理由に週刊化した [統一報 1999.1.1]。

（10）2大民族団体である民団、統総（在日朝鮮人総聯合会）は、それぞれ独自の機関紙もつ。統一日報社は民団傘下ではないが、民団のHP等では「在日韓国人報道機関」部門名を連ねている。

（11）投稿要綱では、「内容 = ①国情統一問題についての主張や提案②韓・日間の問題についての意見③在日同胞社会の問題に関する指摘、意見、主張、提案④本国政府や駐日公館、および民団をはじめとする同胞自治団体への要望⑤生活の中でおきた公共的性質をもつできごと（世代間の対話、美談などの紹介、家庭のあり方など）についての意見⑥気づかれていない重要なできごとへの実意喚起⑦その他」をとる。94年に「声援号」と改称された後、当該欄が大幅に縮小すると前後して投稿要項を簡略化し、「民族や祖国、在日同胞、日本との関係などにまつわるようなテーマ」（1996年）となる。なお、投稿は「国語でも日本語でも可」とある。

（12）この統計では、いわゆるニュー・カマー韓国人や帰化後の日本籍者が峻別できない、また事実婚が含まれないなどの理由から、在日韓国・朝鮮人 = 韓国・朝鮮籍特別永住者の結婚の実態を捉えるには限界がある。なお『人口動態統計』は、戦後については1955年分以降となる。


（14）同年末には「写真で見る78年の記録 在日同胞社会」の一冊を刊した [統一報 1978.12.30]。

（15）創刊から1996年までのバックナンバーから抽出。計149件が該当したが、2件は複写失敗。全て手作業であるため、見落としなどの可能性は否定できない。
（16）以下で、結婚関連投書147件のうち、3種類のいずれかに分類可能であった111件を分析対象とする。非該当とした投書は、結婚式の感想など、配偶者選択に言及しないものである。

（17）分類に際しては、選択主体について必ずしも明示的に述べられていない投書の主の立場をもあえて読み込んだ。ただし分類基準は一貫させ、客観性の確保に留意している。

（18）70年代の家族主義型が相対的に少ない理由は、親が選択主体となる結婚がなかったというよりは、親が決めるのが当たり前であり、取り立てて話題にならなかったためかもしれない。

（19）婚姻型において共同体主義は、「家」制度を基盤とする明治期の家族主義に対照させる形で設定された、地域社会に伝統的な婚姻原理を指す。したがって共同体という枠は、家族以外の婚姻原理にあとづけた分析カテゴリーである。人の移動と行動領域が拡大した今日、日本社会の共同体主義も、当時と同じ枠のままでは捉えられないだろう。

（20）図4の投稿書を見ると、若年層はこの議論の場から降りつつある。新しい若年層が議論しなくなったのか、他のメディアに移行したのかは定かでない。

参考文献

鄭 暮恵 2000「心の健康（メンタル・ヘルス）」こそが重要課題になる次代以降」UGビジネスクラブ
『在日』から「在地球」へ——在日コリアンビジネスマンたちへのメッセージ』エーアイピー、pp.28-40。


Fraser, Nancy 1992 “Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy,” Calhoun, Craig (ed.), Habermas and the Public Sphere. MIT Press (= 山本啓・新田滋訳
「公共圏の再考——既存の民主主義の批判のために」『ハーマスと共空間』未來社、1999 pp.117-159。)

過 放 1999『在日華僑のアイデンティティの変容——華僑の多元的共生』東信堂。

橋本みゆき 2002『在日韓国・朝鮮人の配偶者選択に関する一試論——家族の中の『長男』を中心に』『年報社會学論集』14: 201-213。

姬岡 勤 1976「婚姻の概念と類型」大橋薫・増田光吉編『改訂家族社会学』川島書店、pp.59-83。

和泉栄侍 1994『アルトマン症候群』三一書房。

亀山宗男 1999「〈O-157〉という経験——新鮮投稿欄にみるリアリティ構成」『ソシオロジー』44(1): 55-70。

李 良洙 1966『朝鮮婚姻法』宗文館書院。

町村敬志 1994「エスニック・メディアの歴史的変容——国民国家とマイノリティの20世紀」『社会学評論』44: 52-65。

横山多喜子 1998『配偶者選択と結婚』横山多喜子ほか『変容する家族と社会』建帛社 pp.35-60。

大出春江 1989『女性投稿欄にみる社会意識の変化——1953年から1986年までの『ひととき』質的研究の試み』『東京文化短期大学紀要』8: 23-40。

尾文成 1990「受験の昭和史——『受験時代』の投稿ユーモア欄の分析」『ソシオロジ』14: 131-145。

大東貢生 2002『配偶者選択に見る家族関係——ジェンダーの視点』谷富夫編『家族関係における経緯と分離』ミネルヴァ書房 pp.596-619。

齋藤純一 2000「公共性」岩波書店。

千田有紀 2001「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房 pp.1-41。

善積京子 2000『結婚制度のゆるぎと新しいパートナー関係——結婚の意味が問われる時代』善積京子編
『結婚とパートナー関係——問い直される夫婦』ミネルヴァ書房 pp.1-23。

湯沢昌彦 1989『結婚相談事業等の調査の意義』全国商工会連合会『商工会地域における配偶者不足及び結婚相談事業等に関する調査報告書』pp.1-7。

資料

『統一新報』統一新報社。

（立教大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程）